

## 論文の内容の要旨

論文題目：ケータイのかくれた次元

—副題：モバイル・メディアをめぐる解釈的メディア論—

氏名：金 暲和

本論文は、文化人類学的知見を援用し、モバイル・メディアのあり方を探求した学際的研究である。モバイル・メディアの普及が先駆けていた日本では、「ケータイ学」と呼ばれる、モバイル・メディアをめぐるメディア論的な議論が早い時期から展開された。本論文は、「ケータイ学」の問題意識を受け継ぎつつ、文化人類学的視座と方法論を導入することで、その射程を広げることを試みた。本文では、日本のモバイル・メディア、言い換えれば、ケータイを取り上げた。使用者の立場からケータイのあり方をとらえるという問題意識を立てたうえ、文化人類学の知見を援用した参加型の実践プログラム（ワークショップ、以下はWS）を研究手法として検証した。さらに文化人類学的な視座を見据えたメディア論の可能性を見出すべく、解釈的視座に基づいて使用者の立場からケータイのあり方を記述する視座を、「ケータイの解釈的メディア論」として位置づけた。

本文は、言説編（第一章、第二章）、理論編（第三章、第四章）、実践編（第五章、第六章）の三部で構成される。

第一章では、一般的なケータイ言説を検討した。そこでは、技術中心のかつ産業中心的な視点が強く、日本の情報通信産業の行方と同一視して語る傾向が見られた。情報通信企業の海外市場での低調や不振を叱るテクノ・ナショナリズム的な論調が目立ち、モバイル技術の受容のあり方や多様性に注がれる関心は薄まっていた。「モバイル技術」と「日本」という枠組みの中に閉じられている言説の状況が見えてきた。

他方で、第二章では、第一章の言説とは対立的なケータイ言説を取り上げた。かつて電話や携帯電話について出回ったうわさ話や怪談から、同時代にも活発に語り継がれるケータイの都市伝説まで、ケータイに関わるフォークロア的な言説を検討し、それぞれの時代における通信メディアのあり方を反映した「語りの実践」としてとらえ返した。とりわけ、ケータイの都市伝説は、生活の中で日常的になりすぎたケータイのあり方を覆そうとする「語りの実践」として理解された。

言説編を通しては、ケータイのあり方をめぐって二つの言説空間が浮かび上がった。一つは、ケータイを作る側の見方が反映されている産業中心的な言説空間であった。そこでケータイは、最新の情報通信技術として見なされ、先端技術に関わる国のイメージの先導役として期待されていた。一方、一般的な社会言説で取り上げられることがほとんどないフォークロア的な言説空間もあった。そこでは、ケータイを作る側の意図とは関係なく、ケータイを使う使用者側の見方が写し出されており、普通の人々の日常生活の中に馴染み深いケータイ

のあり方を覆そうとする「語りの実践」がなされていた。言説編を通しては、華々しいモバイル技術をめぐる「技術的営み」と、日常化・陳腐化してきた「使用者の営み」という、異なる二つの次元が共存する様子が浮き彫りになった。さらに、ケータイを使う側の見方は、一般的なケータイ言説に反映されておらず、ほとんど語られない状況も確認された。

理論編では、ケータイの「使用者の営み」をとらえるための視座と方法論について検討した。まず、第三章では、日々の日常実践の中のケータイのあり方をとらえる枠組みとして文化概念の可能性を検討した。文化人類学の文化のとらえ方と、初期メディア論者によるメディアのとらえ方は、両方ともに日常実践の微視的な感覚や経験を重視する。本論文は、そうした文脈に着目し、文化という枠組みを通してケータイのあり方を探求する。従来のケータイ研究は、使い方の多様性・個別性に着目してケータイ文化に取り組んだ。しかしそのようなアプローチでは浮き彫りにならない、日常実践の生活文化的な次元もある。それは、これまでのケータイ研究では浮かび上がってこなかったという意味で「かくれた次元」でもある。本研究では、その差異を明確にするため、ケータイの「基礎文化」という独自の概念装置を用いる。「基礎文化」とは、そうした側面を総称する概念であり、文化人類学とメディア研究を接合させるための操作的枠組みでもあった。

次いで第四章では、ケータイの「基礎文化」をとらえる方法論について検討した。日常の中でケータイは「自明な出来事」になりつつある。そのあり方が当たり前すぎるため、使用する当事者はもちろん研究者さえ気づきにくいという課題を露呈している。こうした認識論的な課題に向き合うため、文化人類学で提起されたエスノグラフィー批判の流れを振り返り、解釈的視座の可能性を提示した。「ケータイのパフォーマンス」という解釈的枠組みを用いることで、言語コミュニケーション行為だけでなく、表情や仕草、手ぶりや身ぶりなどを分析対象に含む。技術仕様に沿って決まる明示的な使用行為をとらえるのではなく、ケータイに関わる日々の日常実践をとらえる幅広い枠組みを試みた。

具体的な手法としては、ケータイに関わる参加型実践プログラム（WS）の可能性を検討した。WSでの実践活動を通じて、きわめてパーソナルな文脈で振り回されるケータイのあり方や、無意識的に行うケータイの日常実践が浮かび上がる。さらにそこで生まれる「ケータイを異化する」という自省的思考を、「自明な出来事」になりつつあるケータイのあり方を捕まえる手がかりにする方向性を見出した。理論編を通じては、解釈的視座に基づいて、ケータイのあり方を文化的なことがらとしてとらえ返そうとするアプローチを「ケータイの解釈的メディア論」として位置づけた。

続けて第三部の実践編は、実際にWS手法を使った実践と分析事例を示した。WS手法からどのような知見が生み出され、研究方法論としてはどのような意義があるのかを明らかにし、「ケータイの解釈的メディア論」を実践的に検討した。

第五章では、「ケータイ・ストーリーテリング」WSという、ケータイについて語る実践活動を取り上げた。ケータイについての物語を通して、当事者がもっているケータイのイメージや思い、解釈の模様を言語化して浮かび上がる。実際に、WSで語られた物語の中で、情緒

的な反応と結びつけられたモノとしてのケータイや、手元に与えられたモノとして密かな身体的習慣を媒介するケータイなどが描かれた。これらは、通信行為のために使われるケータイのあり方とは異なる面々であった。そうしたケータイのあり方を、物質文化に関する文化理論を通して論じた。情報通信技術が商品として交換価値を獲得して「汎用なモノ」として拡散していく方向性とは異なる、個人の生活実践の中で一般的な交換価値では図りきれない固有性を獲得する独自の方向性が明らかになった。

次いで第六章では、「ケータイのパフォーマンス・エスノグラフィー」WS という、ケータイについて演じる実践活動を取り上げた。パフォーマンス・エスノグラフィーという文化人類学的方法論を援用した WS の中で行った「典型的なケータイ風景を演じる」実践活動を素材に、ケータイに関わる主体の身体実践と空間関係性を分析した。主体の身体実践の中でケータイは、物質空間の文脈に合わせて「自己」を象徴する媒介であった。ケータイを振り回す動作は、「遮断する身体」、「共有・協調する身体」、「同調する身体」という三つの局面をもっており、それぞれの局面において他者と「自己」の関係性を示すための「演出」がなされていた。ケータイに関わる文化的実践を通じて創り出される物質空間の局面も明らかになった。公共空間の中に個室のような仕切りを作ったり、閉ざされた私的な空間の中へ他人を積極的に誘い込んだりする実践がなされていた。ケータイは、開かれた空間において個人と外部環境の関係性をコントロールするための道具であり、空間の中で「個」を象徴するモノとして実践されていた。

終章では、以上の考察を通して見出された知見と課題を振り返り、今後の課題と展望を述べた。まず知見としては、ケータイ研究に文化人類学的視座を導入することで、情報通信技術の利用行為とは異なる、ケータイの日常実践のあり方を描くことができたことが挙げられる。自己を象徴するモノとしてのケータイの解釈され方や、実際に身体と空間のあり方を操作する文化的実践の微視的な様子が浮き彫りになった。さらに、そのような文化的探求を可能にする WS 型研究法の可能性と課題も明らかになった。WS 手法を用いた解釈的視座を通じて「自明な出来事」になりつつあるケータイのあり方を効果的にとらえることができた。「ケータイを異化する」自省的思考を生み出し、ケータイの「かくれた次元」を自ずと浮かび上がらせる WS 手法の可能性が確認された。一方、研究者が調査に関わるすべての過程をコントロールできず、必ずしも当初の問いにぴったり合った回答が出ないという側面は、研究方法論としての課題として述べた。

本論文の全体を通しての課題も確かめた。文化人類学の枠組みをメディア研究に援用させていくためには、文化概念の定義をより精練させる必要性が浮き彫りになった。また、WS 型研究手法の実践研究としての可能性と意義について検討していく次の課題も確認できた。以上の知見と課題を確認したうえで、最後に、本論文で提示した〈ケータイの解釈的メディア論〉という視座が、情報社会のメディアのあり方を理解するうえで持ちうる展望を述べた。

<以上>